

読書のすすめ2013

第一線で活躍する科学者、翻訳家、イラストレーター、博物館職員など11名の皆さんに、「子ども向けの科学の本」を3冊ずつ選んでいただきました。読み聞かせの会で定評のある絵本、研究者を夢見た少年時代に夢中になった本、たくさんある近刊書のなかで、これは！と思う本など、選ぶ基準はさまざまです。テーマも各本それぞれですが、「身近な自然に目を向ける」「体験する」「考察する」ことの大切さを伝えたいという共通したメッセージを感じます。ここに掲載した32冊の本が、展示・教育・普及活動のヒントになることを期待してご紹介いたします。（本誌編集委員 島山 泰英）



大貫 朋恵

国立国会図書館国際子ども図書館司書

国際子ども図書館では、子どもに読書の楽しさを伝え、図書館や本の世界に親しむきっかけとなるように、さまざまな催しを行っている。

その中には、科学に興味を持ってもらうためのイベント「科学あそび」がある。また、毎週土日に年齢別のおはなし会を行っており、プログラムには科学の絵本の読み聞かせを組み込むこともある。そこで、子どもたちが特に楽しんでいる様子がうかがえる科学の絵本3冊を紹介したい。

『こいぬがうまれるよ』

■ジョアンナ・コール 文、ジェローム・ウェクスラー 写真、つばいいくみ 訳、福音館書店、1982年

ダックスフントのおながが大きくなり、子犬が産まれて育つまでの2か月間を、子どもの視点で綴っているモノクロの写真絵本。読み聞かせを始めると、すぐに子どもたちの視線が一気に絵本に集中してくる。出産時のリアルな写真が使われているため、子



どもに手渡していいものか躊躇しがちであるが、子どもたちは過剰な反応をすることもなく、神妙な面持ちで真剣に聞いている。静かだが迫力のある一冊。

『どうぶつのあしがたずかん』

■加藤由子 文、ヒサクニヒコ 絵、中川志郎 監修
岩崎書店、1989年

14種類の動物の足型が実物大で掲載され、それぞれの特徴や生態が紹介されている。国際子ども図書館のおはなし会では、足型のページに書かれている動物名を隠してクイズ形式にしている。折り込みになっているインドゾウの足型を広げると、その大きさに、歓声が上がります。

『ふしぎなナイフ』

■中村牧江・林健造 作、福田隆義 絵、福音館書店、1997年

低年齢の子どもたちが特に楽しんでくれる絵本。一本のナイフが水あめのように伸びたり、くしゃくしゃに縮んだり、現実ではありえない絵が見開きで精緻に描かれている。次にナイフがどうなるのか予想しながら見ている子どもが多い。中には、自分がナイフになって、読み手の声と一緒に体を折ったり伸ばしたりして楽しむ子の姿も見られる。



菊谷 詩子

サイエンス・イラストレーター

科学を説明する図や絵を描く仕事をしています。

『バンビ 森の、ある一生の物語』

■フェーリクス・ザルテン 作、上田真而子 訳、岩波少年文庫、2010年

誰もが知っているバンビ、しかしディズニーのアニメと原作では内容が大きく異なります。その原作



が原書の素晴らしいイラストはそのままに、新訳で復刊しました。ノロジカの小鹿であるバンビの一生を描いた物語を科学書というのをおかしいかもしれませんが、復刻版の表紙を描くのを機に再読して、作者がノロジカを実によく観察していたことが分かりました。ドイツの森の鹿になった気分です。最後に自分が人間であることに立ち戻り、自然とどう関わって生きていくのか考えさせる一冊。

『自然スケッチ絵本館』

■キャスリン・シル 文、ジョン・シル 絵
玉川大学出版部、2011年～2013年

シル夫妻による絵本で現在16巻まで刊行されています。無脊椎動物から脊椎動物まで、各分類群の特徴が子どもにも分かり易く、美しい水彩画で表現されています。例えば『軟体動物のここと』（福田晴代 訳）という絵本では、「軟体動物には骨がなく、その体はやわらかくて、ぬれてます。」というミズダコの絵のページから始まります。そして外形の特徴、繁殖方法、さまざまな生活環境に対する適応例を示し、最後に他の生物との関わりについても触れます。地球の構成員である動物たちの自己紹介を見ているような素敵な絵本シリーズ。

『Photobook 植物細胞の知られざる世界』

■西村幹夫・三村徹郎・西村いくこ・真野昌二 監修、
永野惇・桧垣匠 文、化学同人、2010年

中学理科の教科書に載っている動物細胞と植物細胞のイラストは検定が入るためオルガネラは葉緑体しか描けず、動物細胞などは日の丸弁当のような状態です。そんな細胞って単純なんだと誤解してしまった中学生には、是非この本を見て欲しいと思います。内容的には少し難しいかもしれませんが、多大な努力の末に撮影された美しい写真の数々を見ただけで、小さな細胞の中でこんなにも複雑でダイナミックなことが起きているのだと感じさせてくれる一冊。



国司 真

かわさき宙と緑の科学館学芸員

『NHK子ども科学電話相談スペシャル

どうして？なるほど！地球・宇宙のなぞ99』

■NHKラジオセンター「子ども科学電話相談」
制作班・編／NHK出版2013年

本書は夏休み中に放送するNHKラジオ「子ども科学電話相談」に、全国の小中学生から寄せられた地球や宇宙に関する質問と回答を収録した冊子です。小中学生の科学や自然に対する興味や疑問はさまざまです。

「なぜ宇宙には星があるの？」といった根源的な質問から、「花火にはいろんな色があるけど絵の具みたいに黄色と青をまぜたら緑になりますか？」といった夏休みらしい質問。そして「原子力発電と火力発電の違いと悪いところを教えてください」。これはさまざまな立場の考えがあり、すぐに答えが出せない質問です。また恐竜大好少年から「恐竜を復活させることはできますか？」そんな夢のある質問もあります。子どもたちの素朴な質問が現代の自然や社会までも映し出す一冊です。



『NHK子ども科学電話相談スペシャル

どうして？なるほど！生きもののなぞ99』

■NHKラジオセンター「子ども科学電話相談」
制作班・編／NHK出版2013年

前書と同時に発行された冊子で、地球上の動植物に関する疑問質問に回答者が懸命に答えてくれます。昆虫少年からは「カブトムシは冬ごしできないのに、クワガタムシはどうして冬をこせるの？」。これは実際に昆虫を飼育し触れて生まれた質問です。「虫は親に会えないのですか？」「イルカはどうやってねむるの？」目を閉じると子どもたちの表情が浮かんできます。科学館や博物館の来館者から、同じような質問がきっとあると思います。完璧な回答が正解であるとはいえません。その子がさらに興味を持ち、次のステップでもう一度来館し、新たな疑問をおつけてくれるような回答があ

るはずですが。本書には100番目の質問のページがあり、空白になっています。ぜひこの本を読んだ子どもたちに身近でリアルな質問を書いてほしいのです。

『キッチンとお風呂でできる！ 小学生のおもしろ科学実験』

■甲谷保和 著／実業之日本社、2010年

著者の甲谷氏は「キッチンやお風呂にあるいろいろなものが、ちょっと使い方を変わると科学の実験道具になってくれます。おいしい食べものや材料だって、組み合わせをかえると、おどろきの現象を見せてくれます」とあとがきに書かれています。本書は小中学生を対象にした実験教室を横浜や川崎の科学館で企画運営した実績をふまえた著作です。科学の不思議を家庭で安全に体験し、その成功から次のおもしろ実験に進む工夫が、すべてのページに隠されています。



後藤 忠徳

京都大学大学院工学研究科准教授、海洋学者

『科学の世界のスケール感をつかむ』

■小谷太郎 著、ベレ出版、2013年

宇宙。原子。時間。知っているけれども茫漠とした世界を子どもにどう説明したらいいか、悩むことはありませんか？ 平易な文章と楽しいイラストで解説したのが本書です。例えば、果物を使って太陽系の大きさを考えたり、原子の説明では地球



サイズの超巨大細胞が登場したり。本書を読むと、これらのスケール感が分かるような、やっぱり分からないような。「常識」について、1ページずつじっくりと考えたくなる一冊です。原子や宇宙のことをまだ習っていない子どもたちにとっても良い本だと思います。

『すごいぞ! しんかい6500』

■山本省三 著、くもん出版、2012年

日本が誇る有人潜水調査船「しんかい6500」を子ども向けに分かりやすく紹介した本です。ダイオウイカの映像などでも話題の深海。でも、どうやって調査しているのか？ 大人も知らない話がイラスト付きで解説されています。

普通の潜水艦と潜水調査船の潜り方の違いは？

潜水調査船が海底で危機一髪、その理由とは？

どうやったら潜水調査船のパイロットになれるのか？

などなど。海で働く人たちの話もたくさん紹介されています。

『ボノボー 地球上で、一番ヒトに近いサル』

■江口絵理 著、そうえん社、2008年

ボノボは類人猿です。「チンパンジーみたいな感じでしょ？」と思いきや、本書を読むとその違いに驚きます。例えばチンパンジーは争いをケンカで解決しますが、ボノボは抱擁で解決します。チンパンジーは道具を使い、ボノボはコミュニケーションに優れています。同じようなお猿さんで、どうしてこんな違いができたのでしょうか？

読み進むうちに、ボノボやチンパンジーと人間の類似点にも気付かされ、「あれ、これって人間のことじゃないの？」と思えてきます。性行動についての描写もありますが、親子で読むのも良いと思います。

TOKYO SCIENCE CO., LTD.

ミュージアム・ショップ向／教育用地球科学標本



since 1974

地球科学標本／化石・鉱物・岩石
古生物／レプリカ・復元模型
恐竜復元モデル

◆常設ショールーム：紀伊國屋書店・新宿本店1F TEL.03(3354)0131(代表)◆

Fossils, Minerals & Rocks

株式会社 東京サイエンス

TEL.03-3350-6725 FAX.03-3350-6745

http://www.tokyo-science.co.jp

E-mail:info@tokyo-science.co.jp

〒151-0051 渋谷区千駄ヶ谷5-8-2 イワオ・アネックスビル

Practical Specimens for Study of Earth Science

Panasonic

パナソニックだから、
可能なソリューションがある。



Core Products

Security
Communication
Office
Infrastructure
Terminal System
AVC Network

Total Solution

マーケティング・セールス

システムインテグレーション

設置・施工

保守・メンテナンスサービス

クラウド・運用サービス

パナソニック システムネットワークス株式会社 システムソリューションズジャパンカンパニー
詳しくはホームページ panasonic.co.jp/avc/psn/ssj/



小林 晋平

理論物理学者、群馬工業高等専門学校准教授

『学研まんが 新 ひみつシリーズ 有毒生物のひみつ』

■監修：篠永哲、まんが：グビグビー清水、学研、2007年

私が子どもの頃は旧版のひみつシリーズがあって、『記号・単位のひみつ』『地震のひみつ』などが好きでした。中でも一番お気に入りだったのは、毒を持つ危険な動物について書かれた『有毒動物のひみつ』でした。怖いもの見たさだったのか、ドキドキしながら読んだことを覚えています（新シリーズでは植物も含まれるようになり、『有毒生物のひみつ』になっています）。ちょっと変わった視点から生物世界の面白さを教えてくれる本です。



『全天星座百科 新版』

■藤井旭 著、河出書房新社、2011年

この本には88個すべての星座の写真や、見つけ方が載っているだけでなく、それぞれの星座についてギリシャ神話も書かれています（新しくして神話がない星座については、その星座にまつわるエピソードが書いてあります）。「物理学とは何を以て何を見るかである」という言葉がありますが、神話の世界を通して、星や宇宙そのものだけでなく、「星を見つめる人間のまなざし」の方にも興味を持ってもらえたらと思います。

『完訳版 シャーロック・ホームズ全集』

■コナン・ドイル 著、各務三郎 他訳、偕成社

なぜこれを科学の本としてあげたか。それは作者コナン・ドイルがホームズに言わせた「あらゆる不可能を排除して、いって最後に残ったものは、それがいかに信じがたく思えたとしても、真実である。」というセリフが、科学の歴史そのものだからです。事実、量子力学や相対性理論など、私達の世界観をすっかり書き換えた科学理論はたくさんあります。ホームズのこのセリフは「虚心坦懐に世界を見る」という、科学にとって重要なことを教えてくれるのです。

科学も自然が提示する謎に挑戦する冒険譚であり、推理小説です。ホームズのように毎回かっこよく事件解決とはいきませんが、そんな、「わからないことに向き合う楽しさ」を子どもたちに知ってほしいと思っています。



武本 佳奈絵

「おはなしとあそび」pipio主宰

子どもたちに本を手渡す仕事、子どもたちと「おはなしとあそび」の時間を楽しむ活動をしています。科学の足跡を辿り、果てしなく長い歴史の中の一瞬でしかない「今」、果てしなく大きい宇宙の中の点よりも小さい「ここ」についての話ができそうな科学の本3冊を選びました。

『科学者の目』

■かこさとし、フォア文庫、1979年

絵本作家で工学博士でもある著者が1969年から1年間、朝日新聞子ども欄で紹介した41名の科学者の偉人伝です。業績ばかりが賞賛されがちな偉人伝とは一線を画し、人一倍努力を惜しまなかった科学者41名、82個の目に焦点をあてています。例えば「見えぬX線を見つけた」レントゲンの目、「台風の目の法則を見つけた」バロットの目、残念なこ

— ご希望の恐竜・化石・動物・人類の
標本及び模型を探しご案内いたします —

マラウイサウルス
ティタノサウルス科
全長—10m



株式会社 ゼネラルサイエンス コーポレーション

〒107-0052 東京都港区赤坂3-11-14 赤坂ベルゴビル802

TEL:03(3583)0731 / FAX:03(3584)6247

e-mail: sizensi@shibayama.co.jp

http://www.shibayama.co.jp

最先端3D天文シュミレーションと
高解像度+高コントラスト映像によるクラス最高のフルドーム映写システム!!

MEDIAGLOBE-III (メディアグローブIII)

「メディアグローブIII」は定評のあるコンパクトな本体設計を受け継ぎながら、小型ドーム対応した単眼映写方式においてトップレベルの解像度（ドーム直径方向1536ピクセル）とコントラスト比（最大200,000:1）を実現しています。映像品質を決定づける映写レンズには、コニカミノルタの優れた光学技術を駆使した新開発のドーム映写専用高精細フィッシュアイレンズを搭載。さらに新機能として「映像歪み補正機能」を採用しており、「メディアグローブIII」本体をドーム内の壁面近くに設置しても、映写映像を電子的に補正することでドームスクリーン全体に正確な全天周映像を映写いたします。



コニカミノルタ プラネタリアム株式会社

東京事業所 〒170-8630 東京都豊島区東池袋3-1-3

大阪事業所 〒550-0005 大阪府大阪市西区西本町2-3-10 西本町インテス11階

東海事業所 〒442-8558 愛知県豊川市金屋西町1-8

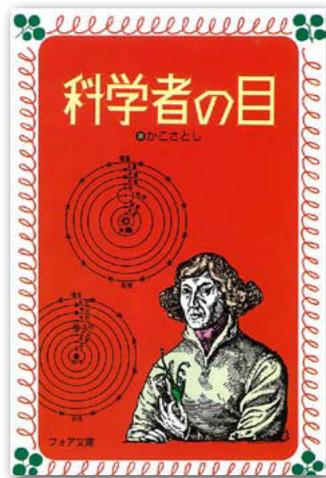
URL: http://pla.konicaminolta.jp

TEL (03) 5985-1711

TEL (06) 6110-0570

TEL (0533) 89-3570

とに「恐龍のように滅亡していった」オーエンの目、等々。真の科学者とは、科学の力が人々に役立つよう研究と努力を繰り返し、真実を見つけ、それを磨き続ける目を持つ努力（また！）をする者だという答えに辿り着き、その人間味あふれる存在に触れ、どこからか勇気が湧いてきます。果たして、科学者が生み出した「科学」が時を超えて正しく使われているのか、立ち止まって考えるよい機会にもなる一冊です。



『このよでいちばんはやいのは』

■ロバート・フローマン 原作、天野祐吉 翻案、あべ弘士 絵、福音館書店、2011年

何かと何かを比べてはじめて「はやい」「おそい」といえます。ウサギはカメより速い。動物のなかでいちばん速いのは？ 人間が造りだした「走る道具」のなかでのいちばんは？ このように、一つひとつを図で比べると、鐘の音の伝わる速さや地球のまわる速さまでもが、鮮明に頭に浮かぶような気がします。では、タイトルにもなっている「このよでいちばんはやいのは」はいったい何か？

宇宙のなかで最速とされている光、それが本当の答えなのでしょうか？

走る道具や、速度を測定する機械を造ったのは人間。だからその答えは人間一人ひとりの身体に隠されているようなのです。謎解きのような、科学の永遠のテーマやロマンのような、いつでもハッとする問いかけです。

NOMURA

人が集う場、そこにはいつも楽しさとか、おどろきとか、が溢れています。

Prosperity Creator
NOMURA
<http://www.nomurakougei.co.jp>

集客環境づくりの調査・コンサルティング、
企画・デザイン、設計、制作施工
ならびに各種施設・イベントの活性化、運営管理

株式会社 **乃村工藝社**
本社：東京都港区台場2-3-4 Telephone 03-5962-1171(代表) 〒135-8622
営業拠点：札幌・仙台・名古屋・大阪・岡山・広島・高松・福岡・那覇・北京・上海
シンガポール・ミラノ・ニューヨーク

『月の満ちかけ絵本』

■大枝史郎 文、佐藤みき 絵、あすなる書房、2012年

どれだけの子どもたちが、月のない夜の闇の深さを想像できるのだろう…と時々考えます。かつて電気がない時代は、月の出ない夜は闇に包まれたため、空に浮かぶ月は大変貴重な明かりでした。遠い昔に思いを馳せながら本書を開き、空の月を眺めると、不思議と「旧友との再会」を果たした気分になります。丁寧で温もりのあるイラストに親しみを感じ、日本語の豊かさを再確認できるおはなしと解説に、月への理解が深まります。そして、また新しい物語が生まれる、そんな科学絵本です。



垂水 雄二

科学ジャーナリスト、翻訳家

『ソロモンの指環』

■コンラート・ローレンツ 著、日高敏隆 訳、ハヤカワ文庫、1998年

子ども向けの科学の本としてどういうものを推奨すればいいのだろう。児童書の理科というジャンルから探すという考え方もあるだろうが、私はむしろ子どもが読んで面白い大人の本を推奨したい。子どもは自分の関心のある分野には驚くほどの専門的な知識や好奇心をもっているもので、その芽を育てることこそが重要だと思う。そういう意味で、このローレンツの本は年月を経ても輝きを失わない名著である。身近な動物を深く観察するだけで、特別な道具も使わずに、動物行動の仕組みの本質を見抜くという洞察力を、ユーモアあふれた文章から読み取ることで、動物好きの子どもは大きな刺激を受けるにちがいない。

ここを動かす空間をつくりあげるために。

調査・企画、デザイン・設計、制作・施工、運営

Tanseisha

株式会社 丹青社 〒110-8549 東京都台東区上野 5-2-2
TEL. 03-3836-7221(代表) www.tanseisha.co.jp

札幌・仙台・新潟・名古屋・大阪・福岡・那覇・北京・上海

『世界の美しい透明な生き物』

■武田正倫・西田賢司 著、エクスナレッジ、2013年

この華麗な写真集には、言葉の説明は不要だろう。被写体の大部分は海の生き物だが、花やチョウ、カエルも含まれていて、そこに写された透明な形と色彩の鮮やかさに圧倒される。ふだん簡単に目にす



ることができる生物ではないが、世の中にかくも美しいものが存在することを知らただけで、子どもたちのなかに自然への好奇心が湧きあがってくるはずだ。

『ドーキンス博士が教える「世界の秘密」』

■リチャード・ドーキンス 著、大田直子 訳、早川書房、2012年

多くのベストセラーで知られる著者が初めて書いた子ども向けの本。とはいっても内容は濃く、小学生にはちょっと難しいかもしれない。だが、知識欲のある中学生なら十分に楽しめるし、大人が読んでも面白い。生命、宇宙、自然現象などについての12の素朴な疑問に、現時点でわかっている科学的知見をもとに正しい答を導いていく。超自然的な理由をもちだしたくなるような難問も、正しい科学的手順を踏めば理解できることがわかる。全ページにカラー・イラストがあり内容の理解を視覚的に助けてくれる。すぐれた子ども向けの科学啓蒙書。

小型ヒューマノイドロボット
NAO[®]
INTERACTIVE HUMANOID ROBOT

音声認識で
こんにちは!

2足歩行
ロボット
ふれ合う
楽しさ

研究開発者に多く使われている2足歩行のヒューマノイドロボットです。福祉・医療・展示などで使われたり、生草を見ても楽しむことができます。

お問い合わせは
TEL : 03-5952-9391
http://www.revast.co.jp
E-mail : revast-pdc@revast.co.jp FAX : 03-5952-9361

国内代理店
株式会社 リバスタ
〒171-0014 東京都豊島区池袋2-68-12

※NAOはフランスのアルデバラン社の製品であり製品名です



古田 綾香

神戸市立青少年科学館学芸員

神戸市立青少年科学館では、2013年の春に企画展「あそぼう、まなぼう、りか本ワールド ―科学絵本、科学読み物の世界―」を開催した際、約400冊の絵本などを展示し、たくさんの方に科学読み物(りか本)を手にとっていただきました。

今回はその中でみなさんに勧めたい子ども向け科学の本を紹介します。

『おすしのさかな』しぜんにタッチ!

■古島万里子 写真撮影、川澄健&サンシャイン国際水族館 監修、ひさかたチャイルド、2010年

いつも食べている日本の代表的な食べ物、お寿司。お寿司ってなにからできているの? お寿司の「さかな」ってどんな魚? そんな疑問に答え



てくれる素敵なお写真絵本です。近年ではお寿司の魚は切れた状態で泳いでいると信じている子どもも出てきています。

海をすいすい泳いでいた魚をさばるところから、完成までしっかり教えてくれますので、海や水族館などで泳いでいる魚いつも食べているお寿司の魚が同じなのだと気付かされます。

展示会開催時も人気が高かったこの本をぜひ親子で手に取って開いていただき、学びの会話を弾ませてみてください。

『大きさをくらべ絵事典』

■クリエイティブ・スイート編、PHP研究所、2010年

この本のいいところは、現実では絶対に横に並べて比較できないようなものを再現しているところ。例えば、25m プールにダイオウイカやシロナガスクジラを入れるとどうなる? 世界の高い山々を整理させるとどれが一番高い? など、身近なものから遠くのものまで比べています。理科が苦手な子どもの中には、数字がたくさん出てきて嫌いという子どもも少なくないと思います。「大きさをイメージすることが理科の始まり」とこの本の冒頭で述べられているように、理科は数字や文字で学ぶより、まずは目で見て感じ、イメージを膨らませることで、いろいろなことが知りたくてたまらなくなってくるはず。です。

『じっけん きみの探知機』

■たぐさんのふしぎ傑作集

山下恵子 文、杉田比呂美 絵、福音館書店、2010年

世の中には不思議なことや知りたくてたまらないことがたくさんあります。でもいろいろなものを調べる前に、まずは「自分の体」という一番不思議に包まれたものをさぐってみましょう！普段何気なく生活している自分の体の仕組みを知り、自分の体を使って実験してみると、もっと自分のことが好きになって、理科も大好きになれるかもしれませんね。



宮脇 律郎

国立科学博物館地学研究部
鉱物科学研究グループ長

博物館・科学館の職員が執筆・監修した、子ども向けの地学分野の本を3冊紹介します。地学は地球の本質に迫る学問で、環境問題や防災などの基礎となる知識の積み重なりでもあります。地球という星の上で生き抜く基礎知識として、多くの子どもの目にとまってほしいと思います。

『地球のはじまりからダイジェスト』

地球のしくみと生命進化の46億年』

■西本昌司、合同出版、2006年

地球の誕生から生物の進化を経て現在の環境の急変に至るまでの地球史を根幹として「奇跡の惑星・地球」の本当の意味を説く良書です。語りかけるような文体から、科学館勤務の学芸員が、来館する子どもたちを対象に想定して



綴ったことが覗えます。概ね3～4ページの項目を、時系列に沿って章立てとし、途中からでも気軽に読めるような工夫もされています。イラストも多用されているので次の増刷からカラー印刷にならないかと期待してしまいます。

『小学館の図鑑・NEO¹⁸ 岩石・鉱物・化石』

■監修：甲能直樹・門馬綱一・他、小学館、2012年

「動物」「植物」「昆虫」と続くシリーズの1つです。「宇宙 地球 恐竜」とは深い関連がありますが、本書では一般に一言で「いし」と一緒にされてしまう「岩石・鉱物・化石」を、それぞれの科学的な意味の違いに気がついて読めるように配慮されているところが特徴です。カラー写真をふんだんに使って「いし」の目の付け所（観察方法）へと導く構成です。大判で野外に持ち出すにはちょっと重いのですが、写真と解説記事のバランスとしては室内で落ち着いて観て読むのに適した図鑑です。多くのコラムも読み物として楽しい内容です。

『いしのはなし』

■ダイアナ・アストン 文 シルビア・ロング 絵
千葉茂樹 訳、ほるぷ出版、2013年

本書は、映画の冒頭シーンのように、水中に静かに佇む黒耀岩（黒曜石）の描写から始まります。そして源たるマグマの描写に続いて、岩石・鉱物の科学的基礎や人間との関わりについて解説を展開し、最後に、火山、堆積、変成といった岩石・鉱物に動きや変化をもたらす地質作用を織り込んで、冒頭の黒耀岩がダイナミックに噴火で吹き飛ばされる場面で終結します。この黒耀岩はどうなったのか？それは、冒頭の水中に佇む姿に戻り、地球での地質作用と同様に、物語はこの絵本の中でも幾度と繰り返される構成になっています。標本の特徴をもっと的確にもっと正確に、と欲も出てきてしまいますが、絵本としてはこれぐらいの優しい描画がよいのかもしれない。



盛口 満

作家、沖縄大学人文学部准教授

子どもと一緒に見てみたいという本を選んでみた。

『いつもとなりにねこじゃらし』

■伊沢尚子 文、五十嵐大介 絵、
月刊かがくのとも2013年8月号、福音館書店

自然はいつも、そこにある。ただ、それに気づかないだけ。ときどき、そのことを意識してみるようにしている。街中にだって、自然はある。そんな気づきの例を教えてくれる絵本。ネコジャラシなんていう雑草がテーマであるのに、絵が実に躍動感にあふれているのが何より魅力的。文章も、この絵にマッチした、体に入り

込みやすいリズムを持っている。自分でも身近な自然を体感したくなる絵本だ。

『ダンゴムシの本』

まるまる一冊だんごむしガイド』

■奥山風太郎+みのじ、2013年、DU BOOKS

これまた、街中でも普通に見ることができ、かつ、子どもたちにも人気のダンゴムシがテーマの本。本自体は大人向きであるが、子どもたちも、大喜びしそうな本だ。まず、表紙からして、目を奪われる。丸まったダンゴムシがずらりとならんでいるのだが、その丸まり方に、種類によってこんなにバリエーションがあったのかと驚かされるのだ。ダンゴムシに種類がいるのは知っているけど、どんなふうに見分けたいのかということについて、身近に手に取れるような本がこれまでなかった。この本を手にとると、これまた、さっそくダンゴムシを探しに行きたくなるだろう。身近な自然に、果てなき奥行きがあることを教えてくれる本だ。

『マーシャルの子どもたち ー水爆の島』

(「たくさんのふしぎ」1996年10月号)

■島田興生 文・写真／津田櫓冬 絵、福音館書店

※品切れ重版未定

身近な自然に、果てなき奥行きがあるのと同様、遠い自然の中にも身近な世界へのつながりがある。3・11後になって、恥ずかしながら、初めてマーシャル諸島という国の存在を知った。水爆実験の犠牲となった島々の歴史が、これから私たちがどのように生きていくかについて、深い示唆を与えてくれるように思えてならない。



山森 貴子

科学読物研究会会員

『宇宙飛行』

■若田光一、日本実業出版社、2011年

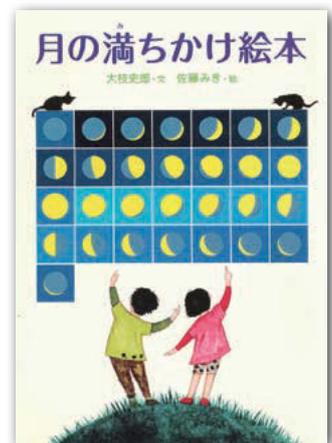
著者は、宇宙飛行士の若田光一さんです。宇宙飛行士を

目指した理由、印象に残っている試験や苦労したこと、宇宙での生活についてなどが、Q&A形式に書かれています。また、宇宙飛行士としての訓練の様子や、2009年に4か月半、国際宇宙ステーションに滞在したときに自身が撮った写真が豊富に載っています。地上での訓練や宇宙ステーションでの生活の様子は写真を見ると良くわかりますが、何よりも宇宙からの写真の美しさは圧巻です。

『月の満ちかけ絵本』

■大枝史郎 文、佐藤みき 絵、あすなろ書房、2012年

昔、月は人々にとって、今よりもっと生活に結びついた身近な存在で、毎夜、形や現れる時間を変えていく月には、上弦の月、立待月、寝待月など、細かく名前が付けられていました。この絵本では新月から次の新月までの29日間の月の呼び名と、その日に見える月



の形が紹介されています。さらに月と地球(日本)と太陽の光との位置関係の図解も載っているので、なぜ、その日にそのように月が見えるのかもよくわかります。併せて月にまつわる風習にも触れられているので、読み物としても楽しめます。巻末には2012年から2019年までの月の満ちかけ表も載っています。

『宇宙探検えほん』

■監修協力 宇宙航空研究開発機構(JAXA)、小学館、2013年

タイトルが示す通り、天体についてというより、宇宙探検の方法や実績、進行中の計画、将来像という視点でまとめられた絵本です。太陽系の天体図鑑では、接近した探査機や計画中のミッションが紹介されています。世界のロケット図鑑では、イプシロンも紹介されています。宇宙飛行士名鑑では、今まで宇宙飛行をした526人の中から、83人が紹介されています。夫婦で、双子で、親子で宇宙飛行士など、面白いエピソードも見つけられます。国際宇宙ステーションの様子や、他の天体を目指すための技術や課題についても具体的に触れられていて、宇宙がより身近に感じられ、これからの宇宙探検に、夢が膨らむ絵本です。